

品川女子学院校長

うるし 漆 しほこ 穂子さん



61年生まれ。他校の教師をへて89年、品川女子学院（東京）へ。06年、父の後を継ぎ6代目校長に。著書に「女の子が幸せになる子育て」など。＝郭允撮影

女子に限定したこまやかなケアができる。それが女子校の魅力でしょう。品川女子学院では、18歳の大学進学のために先、28歳の未来から逆算して、女性の生き方を設計できるような教育をしています。

28歳といえば、仕事に手ごたえを感じるころ。でも同時に、第1子の平均出産年齢が近づくころでもあります。そこで仕事とか家庭とか、何かをあきらめなくてもすむように、中学・高校の計6年間で早めに、しっかり準備しましょうという教育です。

たとえば、中学3年生になると、生徒たちは企業とコラボレーション（協力）して商品開発などに参加します。若手の女性を中心とした社員のみなさんを指導役として、市場調査に出かけ、分析して議論し、商品のネーミング、包装デザイン、CM制作などを手がける。そして、みなさんの前で発表し、審査してもらいます。実際の商品になったものもあります。

自分はどんな職業につきたいか。そのために何を身につけたらいいか。資格や免許が必要なのか。そんなことを意識してもらうため、生徒と社会をつなぐ授業に力を入れています。

こうして生徒たちは、いろんな職種があることを知り、仕事の厳しさや

実社会みすえスイッチオン

りがいを感じ、自分の人生を考え始めます。将来やってみたいと思える目標ができたとき、生徒のやる気にスイッチが入るのです。

女子校のメリットといえば、男子に頼るといふ意識が生じないことも、そうでしょう。生徒会長、大工仕事、理科の実験。共学にいたら、男子の役割になりがちな分野も担うので、意外な特技や能力に気づくことがあります。とくに育つのはリーダーシップです。

本校は、まだ女性に参政権のなかった80年以上前に、私の曾祖母が創立しました。歩みは平坦ではなく、一時、存続の危機もありました。当時、私は他校の教員でしたが、卒業生の母校をなくしてはならないという一心でここに移り、校舎の改築、制服の変更などあらゆる改革にとりくみました。

少子化の進む日本では今後、女性が家庭と仕事の両面で、社会を支えなければなりません。親世代が見たこともない職種や立場で、娘たちが活躍する時代がすぐそこに来ているのです。

そんな時代に向け、新しいスタイルの「女子教育」へと改革したつもりです。小学校から大学まで共学を出て、その良さも十分知る私が「これだったら受けたかった」と思える内容に、さらに挑みます。（聞き手・山本晴美）